

子どもの夏かぜについて

南矢島こどもクリニック

時澤 桂子 先生

一般的に夏かぜとは、高温多湿を好むウイルスによる感染症を指します。手足口病、ヘルパンギーナ、咽頭結膜熱などが代表的な病気です。これからの季節に流行します。

手足口病：手のひら・足の裏に米粒様の水疱ができ、口の中にも口内炎ができます。時には肘・膝・おしりなどにも発疹がみられます。痛みや痒みはほとんどありません。しかし口内炎がひどくなると痛くて食べられなくなることもあります。高熱が出ることは少なく、数日で症状は治まります。

ヘルパンギーナ：突然の高熱・不機嫌・のどの痛みで発症します。上あごの奥に水疱ができ、38～40度の高熱が2～3日続きます。数日で自然に治まりますが、のどの痛みが強く水分も取れなくなると、脱水症になることもあります。

咽頭結膜熱(プール熱)：アデノウイルスによる感染症で、夏にプールを介して流行するのでプール熱と呼ばれますが、プールに入らなくてもうつります。夏以外でもみられ、39～40度の熱が4～5日続きのどの痛みが強く、目も赤くなります。のどの検査で診断できます。頭痛・吐き気・下痢・腹痛を伴うこともあります。

感染経路は、夏かぜのウイルスが腸にも増殖するため、のどや鼻の分泌物以外に便からも感染します。予防には手洗いとうがい重要です。症状が治まった後も2～4週間は便にウイルスが出ますので、子ども本人だけでなく、家族もオムツ替えの後などにこまめに手洗いをしましょう。

夏かぜのウイルスに直接効く薬はありません。抗生物質も効果はありません。安静にして水分補給を心掛けて、自然に治るのを待ちます。

まれに髄膜炎などの合併症を起こすこともあります。高熱・頭痛・嘔吐が続くときは早めに医療機関で受診しましょう。